

## 【研究ノート】ポストコロナの神学教育：関東圏の福音派の神学教育機関に焦点を当てた質的研究

著者	岡村 直樹, 徐 有珍
雑誌名	キリストと世界
号	33
ページ	157-182
発行年	2023-03
URL	<a href="http://doi.org/10.34581/00002529">http://doi.org/10.34581/00002529</a>

## ポストコロナの神学教育

関東圏の福音派の神学教育機関に焦点を当てた質的研究

岡村直樹、徐有珍

### I. 研究の背景と方法

コロナウイルスの感染拡大は、2020年3月11日、世界保健機関（WHO）のテドロス事務局長によって正式にパンデミックとして認定された。この事象は、日本社会の様々な営みに多大な影響を与え続けており、神学教育も例外ではない。文部科学省は、感染の拡大が世界規模で始まった2020年1月より、管轄する教育機関に対して繰り返し注意喚起を行いつつ、3つの密を防ぐという観点から、対面式授業の実施方法の変更に加え、卒業式の延期を要請し、多くの大学や専修学校はその要請に応え、必要な対応を実施した。本稿の執筆者が所属する東京基督教大学（TCU）では、学部と大学院および専攻科において新型コロナウイルス感染予防の一環として、2020年5月の春学期開始時より授業のオンライン化が実施された。2022年10月の時点では授業の大半は対面に戻っているが、授業時におけるマスクの着用は依然として義務付けられている。またそのような状況の中で、以下の3種類の授業は、代表的なオンライン学習ツールのひとつであるZoomを用いて現在も実施されている。

---

1 文部科学省『学校の卒業式・入学式等の開催に関する考え方について』（事務連絡：令和2年2月25日）より、以下原文「感染が発生している地域におきましては、学校の設置者において、実施方法の変更や延期などを含め、対応を検討していただくようお願いします」([https://www.mext.go.jp/content/20200225-mxt\\_kouhou02-000004520\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200225-mxt_kouhou02-000004520_02.pdf)：2022/11/30 確認)

- (1) 口元を見る発音の確認が必要とされる言語系の授業
- (2) 遠方の外部講師に講義を依頼している授業
- (3) オンライン受講を可能にしている授業

1) の言語クラスのオンライン授業は、マスク着用の必要性が無くなった時点で終了となることが想定されている。2) の取り組みは、その利便性から、今後も継続されると思われるが、その適応範囲は、授業の全体ではなく一部（外部講師の担当部分）である。3) の取り組みは、TCUの本科生以外の科目等履修生や聴講生が、オンラインを用いて受講できる、「どこでもTCU」というプログラムであり、2021年度より開始された。TCUでは、年間150以上のクラスが提供されているが、その中の1-2割程度のクラスが、「どこでもTCU」プログラムに該当し、ハイブリッド方法を用いて教室の対面授業をオンラインで受講できるようになっている。

TCU以外の多くの関東圏の福音派の神学教育機関も、コロナ禍において授業のオンライン化を実施したが、その後比較的早い時期に対面授業に戻った学校と、本格的にオンライン授業をカリキュラムに取り入れた学校とに分かれている。

本研究は、コロナ禍において授業のオンライン化の実施を開始した関東圏の福音派の神学教育機関（福音主義神学を標榜する学校）6校の教員へのインタビューを実施し、コロナ禍における神学教育や学生の動向、今後への期待や不安、またポストコロナ時代の神学教育のあり方等について考察したものである。

インタビューの対象となったのは、関東圏の福音派の神学教育機関の現教員で、男性7名、女性1名であった。インタビューはオンライン（Zoom）で実施された。インタビュー参加者の所属神学教育機関は、以下のとおりである。（五十音順）

イムマヌエル聖宣神学院  
お茶の水聖書学院

聖契神学校  
聖書宣教会・聖書神学舎  
中央聖書神学校  
東京基督教大学

質的研究において研究の参加者を得る方法をサンプリング (Sampling) と呼ぶ。サンプリングとは大人数を研究の対象とすることの出来ない質的研究において、より意図的に研究対象者を選択しようとするプロセスを指す言葉である。本研究では「均質サンプリング」が選択された。「均質サンプリング」は、研究者が研究トピックについて一番良く知っているのは誰か、また研究トピックについて一番良い情報を得られる状況や場所はどこかということを考え、研究参加者を目的に応じて選んでいく方法である。「均質サンプリング」は、一定のサブグループをより深く知ろうとする際によく用いられる方法で、いくつかの共通条件をつけて研究対象者を絞り込むことである。本研究では、関東圏の福音派の6つの神学教育機関の現教員の中から、本研究の趣旨およびインタビューを受けることに賛同してくださった8名が選択された。

インタビューは、以下の7つの質問をあらかじめメールにて送り、ひとり60分から90分ほどの時間を用いて実施された。用いられた7つの質問は以下の通りである。

- (1) 2020年にコロナ禍が始まって以降の2020年度と2021年度に、教鞭を執っておられる学校の神学教育の方法や内容、学生さんの動向等に関して、それ以前と比べてどのような変化がありましたか。ご存じの範囲でお話してください。
- (2) 2020年度と2021年度(コロナ禍)の神学教育を振り返り、ポジティブ(またはどちらかと言えばポジティブ)であると認識されておられる部分について自由にお話してください。
- (3) 2020年度と2021年度(コロナ禍)の神学教育を振り返り、ネガティブ(またはどちらかと言えばネガティブ)であると認識されて

おられる部分について自由にお話してください。

- (4) コロナ禍が始まる前の2019年度以前と比べて、教鞭を執っておられる学校の神学教育の方法や内容には2022年度以降どのような変更（コロナ以前へ戻ることも含む）が加わりましたか。またその変更に対する学生さんの反応はどのようなもののでしょうか。変更の理由も含め、ご存じの範囲でお教えてください。
- (5) 変更が加えられた2022年以降の神学教育について、期待しておられる点があれば自由にお話してください。
- (6) 変更が加えられた2022年以降の神学教育について、不安に思っておられる点があれば自由にお話してください。
- (7) 教鞭を執っておられる学校の神学教育の今後のありかたについて、感じておられることを自由にお話してください。

インタビューにおけるデータ収集は、マイケル・クイン・パットンの著書、*Qualitative Research and Evaluation Methods* に記述されたグラウンデッドセオリーのガイドラインに沿って実施された<sup>2</sup>。本稿のII章以降には、カテゴリー化されたインタビューデータを「インタビュー結果」として、またパットンの方法を用いて分析された内容を「インタビュー分析」として記す。またそこに「神学的考察」を加え、最後に「実践的提言」をまとめたものを書き記す。

## II. インタビュー結果

インタビューを通して収集された言語データは、質的研究の方法に沿ってさまざまなカテゴリーに分けられた。そこから新たなまとまりや概念を構築していくプロセスの中から浮かび上がってきた事柄を、「インタ

---

2 Michel Quinn Patton, *Qualitative Research and Evaluation Methods*, 3rd ed., (Thousand Oaks: Sage Publications, 2002).

ビューの結果」として、本研究の目的に合わせてまとめた。本章ではそれらを、「コロナ以前の教育形態とコロナ禍による変化」「コロナ対応によって生じたポジティブな変化」「コロナ対応によって生じたネガティブな変化」「ポストコロナの方向性と課題」という4つの項目に分けて紹介する。それぞれの項目の内容を把握する上で重要と思われる回答の併記は、回答者や学校の特定を極力避ける形で列記され、さらに読みやすさを考慮しつつ語尾を「である形」で統一した。

## (1) コロナ以前の教育形態とコロナ禍による変化

(コロナ以前の教育の形態はどのようなものであったか。)

- ・ 教団立の神学校である。
- ・ 超教派の神学教育を行なっている。
- ・ 基本全寮制であり、ほとんどの学生は寮もしくは学校周辺に居住している。
- ・ 基本全寮制であり、通学生の割合は1割程度である。
- ・ 寮生に対してその8倍程度の通信科生が在籍している。
- ・ 寮は訓練の場所ではなく、居住の場所として提供している。
- ・ 通学主体で、仕事を持っている学生や子育て、介護中の学生が多い。
- ・ 牧師養成教育を主眼に据えた神学教育を行なっている。
- ・ 教会教職者、および信徒献身者を教育の対象としている。
- ・ 信徒教育、および継続教育を主に実施している。
- ・ 10代の学生からシニア生まで、対象者の幅は広く設定されている。
- ・ 学生の中心年齢層は、50-60代である。
- ・ 学生は大卒者が中心である。

(コロナ禍にはどのような対応がなされたか。)

- ・ コロナ前は、主に対面授業を中心に行なっていた。
- ・ コロナ前からスカイプを利用し、学生が教室、教師がオンラインで授業をしていた。

- ・コロナ前は、対面授業に加え、通信教育の形式を備えていた。
- ・2020年度前期は、授業開始を遅らせ、5月からはオンラインを用いた授業を再開し、また一部のクラスは対面でも実施した。
- ・2020~2021年度は、全面オンラインで授業を行なった。
- ・教師が教会からリモートでオンライン授業を行ったり、学校に来ることのできる教師が、図書館からリモート授業を行ったりすることもあった。
- ・寮教育を行っていたがコロナの影響で寮を閉鎖した。
- ・2020年度秋より寮を一部再開し、段階的に入寮者を増やしていった。
- ・コロナの影響で入寮を1ヶ月ほど延期した後、寮を再開した。
- ・単身寮は、2人1部屋を原則としてきたが、1人1部屋に変更した。
- ・同室者という理解はそのまま、2人で2部屋を使うという形にした。
- ・当初は対面に早く戻すことを望んでいたが、何を基準に対面を止めるかの基準が明確ではなかったため、難しかった。緊急事態宣言等は、ひとつの基準ではあった。
- ・ハイブリッド授業も検討したが、高度なIT技術が求められることもあり、それは断念した。
- ・オンデマンドのオンライン教育は提供せず、すべてリアルタイムに限っている。
- ・基本はリアルタイムで顔を出し、その場で意見交換する。
- ・リアルタイム受講のみを出席扱いとしており、オンデマンド録画視聴は欠席扱いとしている。
- ・アンケート調査で多くの学生が寮教育と対面授業を望んでいることがわかった。
- ・アンケートでは、大多数が対面よりオンラインを希望していたこともあり、オンラインを継続した。
- ・2021年度は、継続教育を希望する教職者に限りオンライン教育の門戸を広げた。

## (2) コロナ対応によって生じたポジティブな変化

(学生はコロナ対策にどのように適応したか。)

- ・ 学生同士の物理的距離が非常に近い寮において感染爆発を起こさなかったことは自校のコロナ対応の成果だと思う。
- ・ 2020年度に全面オンラインに切り替えたが、学生の適応には目覚ましいものがあった。
- ・ 学生の適応力は高いので、よく対応していると思う。
- ・ 学生の適応力もあり、与えられた条件の中で、精一杯学ぶことが出来るようになり、不安はだいぶ解消されたのではないかと思う。
- ・ 寮教育を継続したこともあり、コロナ以前とは異なる部分もありつつ、コロナ禍での新しい日常を作り出していったのではないかと思う。
- ・ コロナ禍では、休学、退学を含め、メンタルの部分で大きく調子を崩す者はいなかった。
- ・ コロナ禍で体をケアすることが求められたことや、コロナ禍の制約で、学生のクラス外の働きが減ったこともあり、体調面で無理をする学生が減ったのではないかと思う。
- ・ コロナ禍で一人になることが強いられたが、そのような試練を通して、神の前に一人であるということを考える良い機会になったのではないかと思う。

(オンライン教育の利点とは何か。)

- ・ オンライン教育のスキルアップがもたらされ、ペーパーレス化も定着した。
- ・ レコーディング機能を用いた繰り返し学修もできるようになった。
- ・ 資料のオンライン提供がスムーズにできるようになった。
- ・ 今までの講義資料がオンラインで使いにくかったので、教師が講義資料を見直すきっかけとなった。
- ・ 画面共有等を用いての、学生さんに提供する情報量が増えた。
- ・ 学生のメールアドレスを学校が把握することができるようになり、情



報伝達がよりスムーズになった。

- ・グーグルクラスルームの質問機能を用いて授業の感想や質問を書き込んでもらったが、対面より意見交換の量が多かったと感じることもあった。
- ・ブレイクアウトルームを使つての小グループディスカッションは、教室よりやりやすく、利便性も高い。
- ・別グループの声も聞こえないので、より集中しやすい。
- ・ランダムにブレイクアウトルームの構成を変えることも可能で、教員も巡回しやすい。
- ・Zoomの活用によって、神学校のみならず、教会にとっての学びや研修の機会が増えたと思う。
- ・フィリピン在住のアメリカ人の先生が、京都在住の通訳者を介して講義を行い、学生が教室と自宅からリアルタイムで受講、加えてオンデマンドでの受講もあった。
- ・チャペルのメッセンジャーも、近隣の先生から、全国各地の先生へと広がっていった。
- ・遠隔地でも受講でき、仕事との両立が可能となった。
- ・学校の教室は小さく、オンラインでは、より多くの学生さんをクラスに受け入れることが可能となった。
- ・今までは神学教育の地域格差があったが、地域差が少なくなったと思う。
- ・地域教会で、奉仕をしながらの訓練が可能となった。
- ・通信科の学生もオンデマンドではなく、リアルタイムで受講できるようになった。
- ・介護者や、子育て中の人々が、学びに参加できるようになった。
- ・オンライン講義が可能となり、教師の採用の幅が広がった

### (3) コロナ対応によって生じたネガティブな変化

(オンライン教育の欠点とは何か。)

- ・学生の通信環境の格差があった。
- ・安定した音質を確保できないという問題が生じた。
- ・オンライン化への技術的な対応が難しかった。
- ・オンライン教育が増えたことで、教職員への負担も増えたことが危惧された。
- ・メールやZoomを用いてのコミュニケーションには難しさがあったと思う。
- ・技術的な対応が難しい教師がおり、ITに詳しい学生が対応したが負担になったかもしれない。
- ・学生さんに年配の方が多く、IT格差が感じられた。
- ・教師の側にも同様にIT格差があった。
- ・ハイブリッド授業は、教師への負担が大きい。
- ・全面オンラインでは物足りないという意見が多かった。
- ・オンライン教育に集中できない学生がいたことは事実。
- ・オンライン授業で腰痛や頭痛が起こった。
- ・オンライン授業で画面に顔を出すことにストレスを感じる学生がいた。
- ・運動不足気味となった。
- ・対面授業や寮教育がなくなり、人間関係の希薄化が起こっている現代社会にあって、そのことに拍車がかかってしまったことが懸念される。
- ・肌感覚の交わりが持てない。
- ・立ち話がしにくい。
- ・授業後の交わりがない。
- ・図書館が使えない。
- ・学生に対する臨機応変な対応がやりづらくなかった。
- ・学生のみなさんの雰囲気分かり辛い。
- ・対面とオンラインの受講者が一体感を持つのは難しいだろう。
- ・対面であれば、学修のコミュニティができるが、ハイブリッドでは困難なのではないか。

- ・対面とオンラインの授業の差を超えることは難しいと感じている。
- ・対面のクラスとオンラインのクラスには質的に大きな違いがある。
- ・相違を数値化したわけではないが、例えば授業前後の時間の質問や交わりの機会は非常に重要であるとする。

(教育機会の減少はどのようなものであったか。)

- ・教師との接触が無くなったことをネガティブに感じているという意見を学生から聞いている。
- ・年齢が高い学生にとって、若い人との接点を持てなくなったのは残念。
- ・礼拝後のコーヒータイムの交わりが無くなった。
- ・コロナ前の様々な活動を知らない世代の学生が増え、訓練の機会も失われているのではないかと思う。
- ・伝統が失われていくという部分もあるかと思う。
- ・対面が無くなったことで、コミュニケーションの機会が減った。
- ・今までの教育の中にあつた、多少窮屈に感じられることの中で発生した学びや成長の機会が失われてしまうのであれば、それは残念だ。
- ・学校でも、教会でも、マスクをし、声を抑えて礼拝しなくてはならず、信仰表現の部分が大きな課題となっている。
- ・夏、冬の長期派遣（住み込んでの長期奉仕の機会）が無くなった。
- ・3月のキャラバン伝道がなくなった。
- ・夏季伝道の機会がなくなった。

(対面の欠如にはどのような教育的課題があつたか。)

- ・皆で集まって、濃厚な聖霊様のご臨在の中での礼拝は、我々の大切なアイデンティティー、しかし対面が減る中で、そのような祈りの時間、聖霊のバプテスマの体験の機会も減っているのではないか。
- ・授業の周辺にある時間が失われたことが寂しいと感じる学生さんの意見が多かつた。
- ・年齢層が上の人の方が、下の人より、交わりの機会をより欲している

のではないかと感じる。

- ・神学教育は、学生と教師の対面の中で行われるものだと思う。
- ・人格的な交わりは、オンラインによって失われた。
- ・全体で見れば、失われたことの方が大きいと思う。
- ・情報伝達の部分が中心的な大きなクラスでは、オンライン授業でも十分な神学教育が可能であると思うが、実践的な部分を含むクラスでは、オンラインでは重要な部分を補いきれないのではないかと感じる。
- ・信徒教育においても対面の必要性は大きくは変わらないと感じている。

(実践的神学教育の機会は減少したか。)

- ・学生を守るために教会実習の制限をかけざるを得なかったことは残念であった。
- ・神学生に与えられる教会での奉仕の機会が減ったことにより、人と関わる機会が減った。
- ・教会によって実習生への対応が違うので、学びの内容がまちまちになり、格差が生まれた。
- ・授業より実習の部分への影響が大きかった。
- ・学生は教会に遣わされ、牧師の元に訓練を受けることが神学教育の一部となっていたが、この部分に大きな制約が加わった。
- ・牧師の手元に置いていただき、牧師の働きを見て学ぶという、従来可能であったことが出来なくなった学生もいた。
- ・教会に行くことはできても、他の出席者と同じように礼拝だけ守り、奉仕や交わりの機会がないまま、学校に戻ってくることもあった。
- ・1人の牧師によって育てられた学生には、いろいろなスタイルの牧会者に会ってほしいと願うが、コロナ禍で経験の幅を広げることが制限されたことをとても残念に思う。

#### 4) ポストコロナの方向性と課題

(ポストコロナの神学教育のありかたとは何か。)

- ・寮教育は、こういう状況だからこそ大切にしていきたいと願っている。
- ・人間関係に関する学びの機会が失われていかないように注意したい。
- ・伝統だから何がなんでも継続しましょうということでは無いと思う。
- ・対面での関わりを重視してきたことは良さだと思うので、継続すべき部分だと思う。
- ・今後の神学教育のキーワードは、オンライン化と国際化であろう。
- ・コロナ禍での変化もあったが、オンライン化の大きな流れは、以前からあった。
- ・学校の所在地や、学生のロケーションが関係無くなってくると思う。
- ・困難さはあるが、実践的学びの比重が大きなクラスは対面で、コンテンツが中心のクラスは、オンラインでというような分け方も可能であろう。
- ・今後は、世界に散らばっている日本人の神学教育にも積極的に取り組んでいくべきであろう。
- ・他の神学校には他の神学校の価値観や優先順位があるので、神学教育のバリエーションが広がるのは良いと思う。
- ・印象論ではあるが、今までオンラインリソースを積極的に用いた発信をしてきたのは、いわゆる伝統的で福音的な教会よりも、異端、または異端に近い教団教派であったのではないかと思う。より多くの福音的な神学教育機関が、積極的にこの分野での存在感を光らせ、選択肢を提供すべきであろう。
- ・中国語の神学教育を、オンラインを活用して実施する予定である。
- ・校舎の改築を考えているが、オンラインに特化したメディアセンターの建設を考えている。
- ・神学校教育に加えて、教団全体の教会教育のために発信することができるようになることを希望する。
- ・校舎の建て替えに関して、考え方が変わった。

- ・オンラインに特化した施設の検討が必要。
- ・図書館のオンライン化も必要。
- ・コロナ禍での対応はクレーム対応の部分も大きく、みんなで困った経験という側面があったと思う。もともとあった問題（炎上問題のような）が顕在化したと思う。コロナ禍で、神学校にもそれが求められることがわかった。
- ・学生の学びの質の向上の部分は、今後の課題であると思う。
- ・学生が自分自身をよく知る機会がより提供されていくと良いと思う。
- ・専門的な技術スタッフが必要であろう。
- ・現場での、ペンテコスタルな部分をどのように継承していくかが問われる。そのような経験が少ない教職者が現場に出ていくことにも不安がある。在学中に意図的にそのような機会を設けたい。
- ・オンラインだけで牧師を育てるのは無理だろうという意見はあるだろう。諸教会の理解が得られるかどうか心配。
- ・主に仕えることの熱き思いを低下させるようなプログラムになっては欲しくはない。
- ・神学教育は人格育成教育であり、オンラインのみで人を育てることはできないので、その部分が軽視されないようにしなくてはならない。同時に、集まらない人に対しても、何かしらの機会を提供することが必要。

(神学教育機関同士の関係性はどうかあるべきか。)

- ・本校は福音派の好調な時期にたまものの結集を呼びかけて今につながっているが、今後は抜本的な改革を見つめつつ、他の神学教育機関とのより強い連携を模索していきたい。
- ・いままで培ってきた、福音主義神学校協議会やJEAの神学委員会、福音主義神学会との連携の活かしどころが今だなあと感じている。
- ・それぞれの学校の進む方向性が明確になると、協力の仕方が見えてくることを期待している。

- ・本校の特徴を活かした連携を模索していきたい。
- ・それぞれの神学教育機関の特徴が生かされる連携が必要だと思う。
- ・クリスチャンの人口が減少する中で、分散し、細分化されてしまった日本の神学教育のリソースを持ち寄り、より集中できる協力体制を構築することができれば良いと思う。
- ・教派教育は重要だが、可能な部分、例えば基礎的な教育では、教団教派の垣根を越え、協力関係を築くことができれば良い。
- ・自らの出身校ではない神学校に対する不信感を拭い、もっとお互いを信頼し合うことが必要だろう。

### III. インタビュー分析

インタビューデータの分析も、データ収集と同様にマイケル・クイン・パットンの著書、*Qualitative Research and Evaluation Methods* に記述されたグラウンデッドセオリーのガイドラインに沿って実施された。前章においてカテゴライズして列記しデータの分析を、本章では「神学教育の多様性」「有形無形の伝統が失われることへの懸念」「コロナ禍の教育題に対する共通する認識」「コロナ前の教育方針とポストコロナの方向性」という4つの項目に分けて紹介する。

#### (1) 神学教育の多様性

(神学教育の目的は多様である。)

インタビューのデータから明らかになった事象のひとつに、神学教育における目的の多様性を挙げることができる。従来の日本の教会において「神学教育」という言葉から最も頻繁に連想されるのは、教会教職者(主に牧師)養成のための教育かもしれない。本研究は、福音主義を掲げる関東圏の6つの神学教育機関を対象に実施したが、神学教育の目的として掲げられているのは、教会教職者の養成に加え、教会教職者の継続教育(すでに牧会や宣教の現場で活躍する者が、よりよい働き人となるための教育)や、

教会における信徒の信仰成長に関わる教育、そして信徒のリーダーシップを養成するという多重の目的が見られた。

(神学教育の対象は多様である。)

各神学教育機関において、その教育の対象とされている者の年齢層にも大きな多様性が見られた。牧師を目指す者だけをとっても、学部3年生(20歳前後)から、献身し、職種変更を経て学びを開始した30代から50代の者、さらには仕事からの引退を契機に、残された人生を神に献げるために60代半ばから被教育者となった者までが含まれていた。信徒という括りであれば、その対象年齢層はさらに広がり、ティーンエイジャー(10代)から、上は80代の教育対象者も見られた。対象者の背景も同様に多様であった。そこには学生をはじめ、元営業マン、元医者、元役所職員、現主婦、現介護従事者等が含まれていた。彼らの信仰背景もさまざまで、洗礼を受けてから1年ほどの者から、信仰生活が50年以上に及ぶ者、さらには教会の役員として活躍している者も含まれていた。

(神学教育の方法は多様である。)

神学教育のために用いられる方法論にも大きな多様性が見られた。本研究においては、コロナ禍における対応という主題もあり、対面授業やオンライン授業といった、いわゆるクラス学修がメインのトピックとして挙げられたが、対面授業ひとつをとっても、そこには講義や演習、研究発表やグループディスカッションなどが含まれている。オンライン学修にも、リアルタイムの対面講義があったり、時間の制約の少ないオンデマンドによる講義動画の視聴、さらにはグーグル・ラーニングやマイクロソフト Teams等のオンラインツールを用いた学修が挙げられた。さらにクラス学修以外の方法を用いた学修の方法にも大きな多様性が見られた。寮教育はその代表的な例である。

寮教育では、信仰生活の基本を身につけることや、対人関係のスキルを養うこと等に焦点が当てられており、クラス学修とは異なる神学教育の方法として位置付けられている。2020年度、2021年度は、感染予防の観点



から寮教育に大きな制限がかけられたが、2022年度を待たずして、寮教育を再開した学校も複数校あった。寮教育再開は、学校の教育方針によるものであったことに加え、学生に対するアンケート調査の結果から、そのタイミングが早められた学校も見受けられた。

さらに重要な神学教育の一環としての言及が多かったのが、教会実習・インターンシップ、そして学校外チーム活動（キャラバン伝道等）であった。インタビューデータから、特に教会実習がコロナ禍において大きく制限されたことがわかった。2020年の春以降、多くの教会が対面からオンラインへと礼拝の形式を切り変えたことから、学生の教会における対面による実習の機会の大きな部分が失われた。しかしオンライン礼拝の運営に深く関わることで、また違った形での実習を経験した学生も見られた。教会実習同様、インターンシップやチーム活動にも大きな制限がかけられ、学びの機会の減少が共通して見られたが、すべての学校がその一部をすでに再開し、さらに再開に向けた取り組みを積極的に進めているようであった。

## (2) 有形・無形の伝統が失われることへの懸念

コロナ禍が始まってすでに2年間以上が経過しているが、それと同時にそれぞれの神学教育機関がこれまで実施してきた様々な学生主体の活動も、その多くが中断や延期、さらには参加者を大幅に限定した形での実施を余儀なくされてきた。多様な委員会活動やサークル活動、リトリートといった学内向け行事、さらには学園祭やチームによる伝道活動（キャラバン伝道）等もその対象となっている。

特に課題であると感じられたのは、上級生から下級生へとつながっていく、学生による伝統の継承の部分である。今回のインタビュー調査対象校の平均就学年数は3年から4年程度であった。上記の活動の中には、すでに2年間停止しているものも多数見受けられた。活動遂行のためのノウハウや、必要とされる態度、グループ内における役割分担の方法、外部者への対応といった、学生が代々受け継いできた伝統が途切れてしまうことが

一様に懸念されている。もちろんそのような伝統のすべてが神学教育にとって必要不可欠であるとは限らず、活動の見直しや、新たな伝統の形成という側面も存在するが、一度失われた伝統を復活させることには大きな困難を伴うものである。

### (3) コロナ禍の教育課題に対する共通の認識

コロナ禍における神学教育の課題として、最も大きくクローズアップされているのは、大幅に制限された対面授業の代替として用いられるようになったオンライン授業に対する意見やその評価であった。本研究のインタビュー質問の中には「オンライン授業」という文言は含まれていなかった。また前記の III-(1) の分析からも明らかなように、クラス学修はそれぞれの学校が用いている多様な教育方法の一部である。それにも関わらず、この課題がクローズアップされたという事実は、オンライン授業がコロナ禍の神学教育にとって大きな課題として受け取られていることの証であろう。

今回の調査の対象となったすべての神学教育機関において、対面授業の制限とオンライン授業の実施は一様に経験されているが、コロナ禍が継続する中で、そのいずれかの教育の機会を全面的に廃止した学校は見当たらなかった。ポストコロナの神学教育の方針に関しては、オンライン授業を一部継続させながらも、コロナ前のレベルでの対面授業をなるべく回復させるという方針の学校と、オンライン教育を今後の中心的な教育方法の一つとして位置付ける方針の学校とに大きく二分されたことは特筆すべきことであろう。

もうひとつ特筆すべき点として浮かび上がってきたのは、そのような二分された方向性があったにも関わらず、オンライン教育に関する評価は、そのポジティブ面とネガティブ面に対して、ほぼ同様の見解（認識）が、すべてのインタビュー対象者から示されたことである。

具体的には、オンライン教育の利便性、特により多くの信仰者が神学教育にアクセスすることができるようになることと、学修者の個別の事情、

特に時間や場所に対する配慮が可能となることに対するポジティブな意見が共通して繰り返し見られた。

ネガティブな意見としては、オンライン教育の持つ対面性（場所の共有）の欠如が、神学教育における信仰形成や対人力の涵養に対して不十分なのではないかという懸念に加え、この教育方法が広く教会に受け入れられるかどうかに対する不安が共通して表現されたことである。

言い換えるならば、前述した神学教育方針の方向性の違いは、そこにある重要な課題を認識していなかったり、または無視したりすることによって起こったのではなく、オンライン教育のポジティブな側面とネガティブな側面の双方に対するほぼ共通する見解（認識）がある上で至った選択であったということになるだろう。

#### （4）コロナ前の教育方針と連動するポストコロナの方向性

オンライン教育のポジティブ面とネガティブ面に対する意見（認識）をほぼ共有しながら、6つの学校は、それぞれ異なるポストコロナの神学教育方針を持つに至っている。インタビューから見てきたのは、コロナ以前にあったそれぞれの学校の教育方針との関連性である。寮教育を含む、対面授業への回帰という方向性を打ち出した学校は、コロナ以前からそのような教育のあり方に大きな価値を見出し、力を注いでいた学校であった。一方、オンライン授業の継続や拡大に舵を切った学校は、以前より通信教育等を導入したり、より多様な事情も持つ信仰者に神学教育の機会を提供したりすることを大切なミッションとして打ち出している学校であった。

オンライン教育のポジティブ面とネガティブ面に対する意見（認識）をほぼ共有しながら、異なるポストコロナの神学教育方針を持つに至った学校に別れたことは、各校のコロナ前の教育方針と照らし合わせて見る時に、それぞれに必然的な選択であったと分析することができるかもしれない。

## IV. 神学的考察

本章では、ここまでのインタビュー結果と分析を踏まえた上で、それらに対する本研究の研究者による歴史神学的、聖書神学的、実践神学的考察を紹介する。それらは、「テクノロジーの活用と宗教改革の拡大」「オンライン神学教育とパウロ書簡」「神学教育における方法の多様性と聖書の教育方法」「神学教育機関に与えられた賜物とその確認」「ミニストリーの概念と神学教育機関の責務」という5つの項目に分けられている。

### (1) テクノロジーの活用と宗教改革の拡大

16世紀のキリスト教に起こった宗教改革は、その立役者のひとりであったマルチン・ルターの活躍に頼る部分が多い。ザクセン選帝侯の保護や、当時のカトリック教会の金満体質への不満がすでにくすぶっていたドイツ国内の空気も相まって、その改革はドイツ全土、そしてヨーロッパへと拡大していった。その一役を担ったのが、グーテンベルクによって発明された活版印刷の技術であった。彼はアルファベットを金属で活字化し、それを組み合わせることで文章を活版化し、それに圧力を掛けることで紙に印刷した。活版印刷は、羅針盤、火薬に並ぶ、ルネッサンス期の三大発明のひとつとも言われている。ルターの記した「95カ条の提題」は、実用化が進んでいた最新技術である活版印刷を用いて広がり、ほんの数週間でドイツ中に広がったとも言われている。その後もルターの翻訳したドイツ語の聖書も、同じ技術を用いてドイツ国中の信仰者の手に渡っていった。

オンライン教育も、ルターの時代の活版印刷のような最新のITテクノロジーによって可能となっている。ルター同様、その技術を信仰者の育成のために用いることは、歴史神学の観点から見て、キリスト教の価値観から大きく逸脱するものであるとは考えにくい。

## (2) オンライン神学教育とパウロ書簡

新約聖書の中でも、特に信仰教育の現場での引用が多いのはパウロ書簡であろう。パウロ書簡の多くは、キリストと弟子たちの伝道活動の結果として建てられた教会を対象に書かれている。パウロは遠く離れた小アジアやギリシャ・ローマ地域の教会に対して手紙を書き送り、祈りつつ彼らの信仰の営みがより神に喜ばれるものとなるよう働きかけた。パウロ書簡は不特定多数の信者に対して送られたものではなく、対象となった教会の固有の必要に目が向けられている。さらにはコリント人への手紙やテサロニケ人への手紙のように複数回に渡るものもあり、そこには双方向性も存在する。

オンライン教育のポジティブな性質への言及に関して最も頻繁に語られることのひとつは、それが学校から物理的に離れた距離に住む信仰者にも届くということであり、それは神からの啓示を受け、パウロが祈りつつ書き記した書簡の背景にあるスピリットと重なるものであるといえるかもしれない。オンライン教育の肯定的側面に関して「利便性」という言葉が頻繁に用いられるが、オンライン神学教育が、離れたところに住む人に聖書のメッセージを届けようとする行為であれば、それは単なる「利便性」を超えた、より崇高なミニストリーの営みの一部であると言えることができるだろう。

## (3) 神学教育における方法の多様性と聖書の教育方法

聖書に記載された教育方法には非常に豊かな多様性が見られる。旧約聖書には石のモニュメントを視聴覚教材とした方法（ヨシュア記 4:4-8）や、体に紐を結びつけること（申命記 11:19）を通して学ぶ体験学修が記されている。新約聖書では、キリストご自身がわかりやすいたとえ話で語られたり、会堂献金の現場での観察を通して教えられたり、弟子たちを2人1組にしてミニストリーの現場に送り出すというインターンシップ的学修方法も見ることができる。これらの多様な方法は、教育対象者にとって最も有効な方法として用いられたものであり、聖書の教育方法は決して一方向

的な講義形式に終始するものではなかったことがわかる。

本研究のインタビューデータからも、神学教育の現場では非常に多様な方法が用いられていることがわかった。具体的には講義に加え、研究発表やグループディスカッション、オンラインツールを用いた学修、寮教育、教会実習、インターンシップ等が挙げられた。聖書的な神学教育の営みとは、ひとつやふたつの限定的な方法によってではなく、慎重な吟味の上に多様で新たな方法を加えつつなされていくものであると言えるだろう。

#### (4) 神学教育機関に与えられた賜物とその確認

聖書には信仰者に対して神からの賜物が与えられると記されている。また皆が同じ賜物を持つのではなく、それぞれに「与えられた恵みにしたがって」(ローマ 12:6) 様々な賜物が与えられるとある。さらにパウロは、ティアティラの教会(信仰者の集まり)に対して、「信仰」や「忍耐」といった賜物を持つ教会である(黙示録 2:19)と語っているが、神学教育機関も神からの賜物を持つ多くの信仰者によって形成されており、それぞれの学校には個別のユニークな賜物が与えられているという見方もできるだろう。

賜物という言葉を用いることが相応しいかどうかは別としても、今回のインタビューの対象となった6つの学校には、それぞれに数多くのユニークな特徴がある。それらは集められた学生や教職員の構成に始まり、歴史や伝統、また立地や施設の中にも現れている。神からの賜物は、互いのために用いられるべきである(1ペテロ 4:10)とも語られていることから、それぞれの学校には、自校に与えられた神の賜物を見極め、それらに基づいた教育を推進する使命が与えられている。コロナウイルスの感染拡大によって大きく変わった社会の中であって、新たな角度からもう一度、神学教育機関としての賜物を再確認する機会が与えられているのではないだろうか。

## (5) ミニストリーの概念と神学教育機関の責務

パウロは信仰者に与えられた使命に対して、それをミニストリーという言葉を用いて説明する。英語のNIV訳聖書では、ギリシャ語の *diakonia* が *ministry* (ミニストリー) という英語に訳されている。同じ言葉の動詞形 *diakoneo* が新改訳聖書2017では「もてなす」(マルコ1:31)そして「仕える」(マルコ10:45、ヨハネ12:26)という言葉に訳されている。さらにギリシャ語辞典 (*Vine's, Complete Expository Dictionary of Old and New Testament Words*) では、*diakoneo* は「必要を充足する、人生における必需を満たす働き」と定義されている。すなわちミニストリーの対象者をよく理解し、その必要を知るという受動的な働きは、福音を語り、聖書を教えるといった能動的な働きと同様に重要であると言える。

神学教育機関は、教会と社会に仕える(ミニストリーする)働き人を養成する場所であるが、同時にそこに所属する学生に仕える(ミニストリーする)機関でもある。個々の学生の必要は、社会の変化とともに移り変わるものであり、それを継続的に知る努力が必要となる。学生を量的に、また質的に知り、その多様な必要に答えることも、ポストコロナの世界において神学教育を営む学校に与えられた責務であろう。

## V. 実践的提言

1章でも述べられているように、本稿の目的はポストコロナ時代の神学教育のあり方についての議論を展開することである。ここまで8名の神学教育従事者の経験や意見を通して、それを展開してきた。この章では、本稿のまとめとして、研究者による実践的提言を、「教育方法論の深化」「アクティブ・ラーニングの積極活用」「神学教育対象者理解の向上」「神学教育機関間連携の推進」「実践神学研究の強化」という5つのカテゴリーに分けて紹介する。

## (1) 教育方法論に関する対話を深化させる。

インタビューの中には神学教育とオンライン教育の相互関係に見られる親和性と排他性の双方の側からの発言があったが、そこには「……ではないかと思う」といういささか確証に欠けるトーンが感じられた。長年の教育経験に基づき祈りと礼拝の中で導かれ、決断に至ることは重要であるが、実証的な教育方法の検証が付随するとさらに良かったのではないかと感じられた。

福音主義を掲げる神学教育機関は、すべからく福音主義の神学に対する強いコミットメントと情熱を持ち合わせている。しかし教育機関としての、教育の方法に対するコミットメントや情熱に関してはどうだろうか。聖書神学の研究会や歴史神学の勉強会等の実施は頻繁に耳にするが、教育の部分に対する同様の取り組みについて耳にする機会はほとんどないのが現状である。

コロナ禍によって生じたここ数年間の社会の混乱によって、神学教育の方法に対する関心が多少高まっているように思われる。これを契機として、特に神学教育の教育方法論に関する議論を深めてはどうだろうか。研究の具体例としては、「牧師養成教育におけるクラス運営の方法」「神学教育機関の寮教育の効果と検証」「継続教育と最新 IT 技術の活用」さらには「福音主義神学的な教育方法とは何か」といったトピックを挙げるができる。

## (2) アクティブ・ラーニングの方法を積極的に取り入れる。

日本の教育界では近年「アクティブ・ラーニング」と呼ばれる、能動的学修の方法を用いた教育に注目が集まっている。それは教員による一方向的な講義形式とは異なり、生徒の主体的な学修参加を促す「参加・体験型」そして「グループ型」の方法で、中教審による大学教育改革の中でも明文化されている。背景の一つとなっているのは、大学を卒業して社会に出る若者の実践的問題解決能力の低下や、人間関係スキルの欠如に危機感を抱く日本の産業界からの強い要望であり、現在は文科省が旗を振る形で



推進されている。

未来の教会教職者やクリスチャンワーカーにも同様の能力やスキルが必要であろう。聖書を原語で読み、的確に釈義できることの重要性は言わずもがなである。加えて教会内の人間同士の問題を解決し、教会の近隣住民との関係に心を砕き、悲しむ者に寄り添うといった、より能動的で実践的な対人能力やスキルの獲得も必要不可欠である。コロナ禍の影響によって、教会実習やインターンシップ、またキャラバン伝道といった実践的神学教育の機会にかけられた大きな制限が今も継続する中、実践的能力やスキルを身につけることにつながる、キリストご自身も実践されたアクティブ・ラーニングのような教育方法の推進がより積極的に検討されるべきであろう。

### (3) 神学教育における対象者理解を向上させる。

本研究のIV-(5)において、ミニストリーの概念と人間理解の必要性に言及した。神学教育を受ける学生たちを理解し、またそこにある必要を知ることにも神学教育機関に与えられた責務であるが、ポストモダンの価値観の広がりも相まって、人間理解は益々困難になっていると言われる。5年前、10年前に入学した学生と、入学したばかりの学生では、持ち合わせている必要のみならず、基本的能力やスキルにも大きな相違があるという前提に立つことや、またいかにして学生一人ひとりをよりよく知り、理解するかについての具体的な方法論を持つことが重要である。

IV-(5)では「学生を量的に、また質的に知り」と記した。量的とは主に数値化できる部分を指す。学力や経済的必要等については、試験やアンケートといった方法を用いることができる。質的とは、数値化することが難しい、信仰や感情といった部分を指す。未来のミニストリー従事者に対して、人に寄り添うスキルを身に付けることを求めるのであれば、まずは率先して学校側がそのような態度と方法論を持ち、実践することが重要である。

#### (4) 神学教育機関間連携を推進する。

本研究の IV-(4) において、神学教育機関に与えられたユニークな賜物の確認について言及した。それは、それぞれの学校に与えられた賜物を知り、その学校にしかできない教育を展開すべきという神学的考察であった。しかしそれは必ずしも、各校が独立独歩の歩みをすべきであるという結論に結びつくものではない。

日本の教会はここ数十年の間、継続的な縮小を経験している。物質的な、また人的なリソースを結集させなくては出来ないことも起こってきているはずである。各校に与えられた賜物の活用をしっかりと担保した上で、連携可能な部分を積極的に探すことは、日本における神学教育の急務であろう。具体的には、図書館の運用における連携、共同研究の実施といった比較的垣根の低い連携に始まり、教員交換、基礎教育における連携や、共同コースの実施、さらにはプログラムの共同運営などさまざまな可能性が考えられる。全面連携か否かといった二者択一の議論ではなく、可能な範囲の連携を探りつつ、各校の支援者も含め、まずは相互の信頼関係を醸成するところから始められることが必要であろう。

#### (5) 実践神学研究を強化する。

プリンストン大学神学部において実践神学の講義を受け持つ Richard R. Osmer は、神学研究の現状について、以下のように語る。

近現代の神学の諸領域における営みは、非常に自律（独立）的であり、その方法論は至って限定的である。また新たな知を排出することにこだわる反面、教会における実践に対する関連性は希薄である。そのような神学の「百科事典的パラダイム」の中では、その部分が実践神学に（無責任に）委ねられている形となっている。このようなパラダイムは、長年かけて神学研究／教育機関における「サイロ志向 (sil mentality)」を醸成してきた。農業従事者が、一つのサイロに一種類の穀物のみを入れるように、神学の諸領域における営みも、各々の専門

性にこだわったアカデミックサイロに限定された収穫のみに焦点を当ててきた。そして神学の諸領域における営みや、そこに含まれる専門性に対する横断性(横断的取り組み)はより希薄になっていった。このパターンは、近現代的な神学研究/教育機関においては一定の重要性や価値を持つものであるが、ポストモダンの世の中から排出される様々な課題に対しての有効性(有用性)には大きな疑問が残ると言わざるを得ない。<sup>3</sup>

神学教育機関において、それぞれが担当する神学分野での専門家は、当然のことながら、自らの専門分野における学術的方法論の範疇で神学的考察を行う。しかし神学研究の諸領域は、その全てにおいて人間の日々の信仰の営みと深く関わるものであり、そこに実践神学的視点を付け加えることが望ましいと Osmer は主張する。

日本の実践神学研究、特に福音派によるそれには学術的方法論が欠けていると感じられることが多い。伝統的な実践神学の諸分野の研究は、本来の意味での実践性より、組織神学的、聖書学的な考察が多いように見受けられる。またその反面、牧会における職人技の伝授や経験談の発信が実践神学と呼ばれる場合もある。もちろんそれらにはそれらなりの大切な価値が認められる。一方 Osmer の実践神学のアプローチの出発点は、人間が直面する「現実の問題」である。それは人間中心の神学の形成のような自由主義的な方法を意味するのではなく、そこにある「問題や課題を解決すること」に注力するアプローチである。そのためには、まず「あるべき状態」に言及するのではなく、現場で起こっている事象に注目し、その詳細を調べつつ多面的に分析することから始められなくてはならない。その上で神学的考察を行い、具体的な問題解決を模索していく。本来の意味での実践神学の営みとは、そういうことなのではないかと強く感じている。

---

3 Richard R. Osmer, *Practical Theology: An Introduction* (Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing, 2008), 234. (本稿の著者による訳)